

牧野研究室

[モビリティを用いた地域圏再生]

先進モビリティ研究センター
Advanced Mobility Research Center

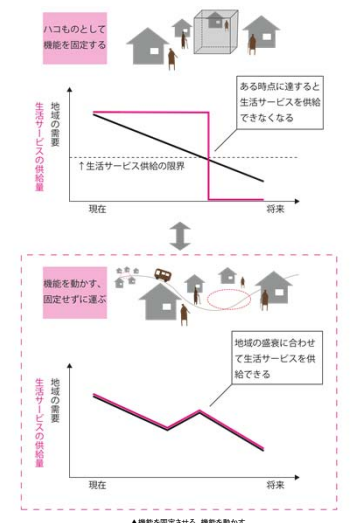
交通政策論、都市計画

たなカー(モバイル施設) & ぷらっと(小さな公共空間)

機能を動かす

高齢化社会、環境配慮型社会を迎えるにあたって、地域での生活を支えていくのは、どのような都市デザインか、衰退していく地域圏の再生の手法として、まず考えられるのは拠点となる施設を作り、そこ人を集めることである。しかし、我々はその限界を感じている。ハコものとして機能を固定する。それは地域の暮らしを支える生活サービスの供給に、限界値、つまりサービス供給の終焉を設定していることを意味しているのではない。施設の維持にはある程度の需要が前提であるが、今後の社会では、その前提は簡単に崩れる可能性がある。

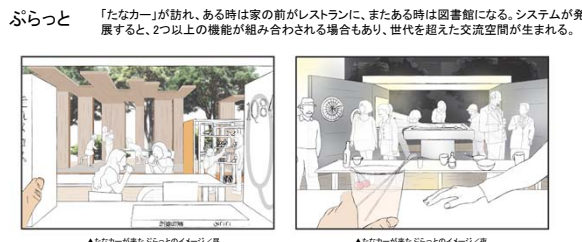
それに対して我々が提案するのが、機能を動かすことである。これにより、地域の盛衰に合わせた生活サービスを供給、維持していくことができる。



たなカー&ぷらっと

機能を固定するのではなく、機能を動かすことを提案する。車で機能を持ち、様々な地区を訪れ、その場所でサービスを提供する。医療機能を持った車がやって来る。役所の機能を持った車がやって来る。そういった車がネットワークを組んで、地域全体の生活サービスを支えるというものである。機能を運ぶ車と、そのネットワーク、システムをデザインすることで、より幅のある生活サービスの提供、地区内での魅力ある空間の創出が実現できると考える。そこで、「たなカー」というモバイル施設と、「ぷらっと」という小さな公共空間を提案する。

「たなカー」は訪れた場所で一定時間過ごし、その時間だけ家の近くに施設を登場させる。「たなカー」は生活サービスの供給と同時に、コミュニティを育む地域交流の場をも創出することができる。「中心」に人を運ぶモビリティから、「中心」を人へと運ぶモビリティへの転換である。「ぷらっと」は「たなカー」が停まるプラットフォームのような場所で、地域の人々の交り合う、集まれる小さな公共空間である。300〜400m間に1つ設置し、高齢者や子どもでも歩いて来られる場所であり、まちなかの新たな居場所となる。

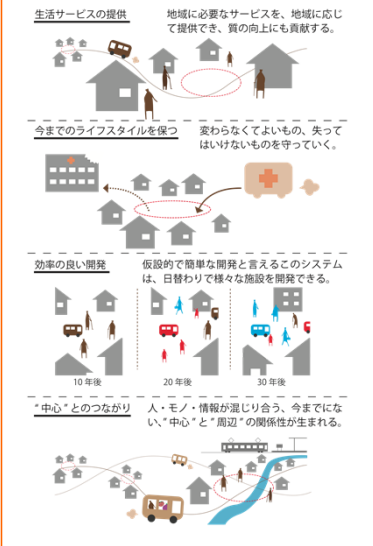


動く機能が社会を支える

「たなカー」「ぷらっと」は次の4つを可能にする。①車により、人々の家の近くまで行くことができる ②訪れる頻度を変えられる ③訪れる場所を変えられる ④機能同士の組み合わせができる

動く機能は、様々な課題を抱え日々変化するそれぞれの地域に対して、柔軟性のある生活サービスを提供することが可能である。変化し続ける社会の、各地域のニーズにフレキシブルに対応できるという点で、機能を動かすことの意味は大きい。

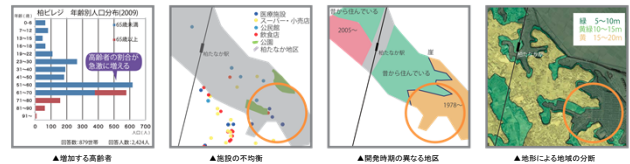
そして「たなカー」「ぷらっと」によるネットワークは、以下のような効果を社会にもたらす。



Field 千葉県柏市東急柏ビレジ

高齢化を迎えるニュータウン

つくばエクスプレス柏たなか駅から1kmほどに位置する、約30年前に開発が始まったニュータウンである。今後一気に高齢化を迎える地域であるが、地区中央の商店街は衰退の道をたどっており、地区内に施設が少ないことが懸念される。また、開発時期や地形により、周辺地域とのコミュニティは生まれにくい上に、地域内でのコミュニティが形成されているとも言えない。



住民のニーズを把握し、住民と共に考える

比較的高密なニュータウンに今後必要な機能は何かを考えつつ、地域の中心に残すべき機能と、自動車に載せて巡回すべき機能を考えている。

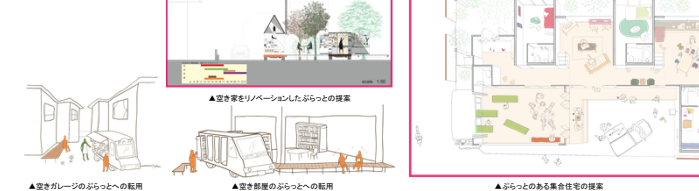
実現に向けてまず必要なのは、住民にこの提案を理解してもらい、その上で住民のニーズを把握することである。展示会、ワークショップを通じて住民に提案を発信すると同時に、全1600世帯を対象としたアンケートを行い、住民の生活実態と今後の課題を分析している。それを基に、「たなカー」「ぷらっと」の適したカタチを検討している。

今年度は実際に「たなカー」の実験を行う。「カフェたなカー」「バーたなカー」を実験的に試み、「たなカー」の持つ効果を検証するとともに、それをきっかけに住民組織との連携を築いていくことも狙いとしている。「ぷらっと」としては、現在まで住宅の庭を転用したもの、ガレージを転用したもの、の2つ実験を行った。

昨年度は「たなカー」の原型として、車に載せる展開式商品棚を試作した。また軽トラを利用した実験も行った。今後はこれを発展させ、軽トラを改造し汎用性のあるデザインを考え、「たなカー」の1つのモデルを構築したい。



提案



実験的取り組み

